

思ひ草

第38号

令和4(2022)年7月6日 発行

教育実習に想う

人間開発学部長 なりた のぶこ 成田 信子

令和4年度になり、2週間続けて中学校の教育実習の訪問指導に赴いた。人間開発学部初等教育学科の学生は小学校教諭を主免許として取得し、3年生で小学校の教育実習を行う。中学校・高等学校の副免許実習は4年生である。わたしの専門領域が国語教育ということもあり、今回は2校とも国語の副免許実習生の研究授業を参観した。

一番強く感じたことは、学生が実習生ながらすっかり教員の顔で授業を行っていたことである。これは積み重ねによるところが大きい。二人とも3年生で小学校実習をしているので、授業をするという構えができています。実習が始まる前には、小学校と中学校の違いについての不安や大学での模擬授業の失敗談などを語り、自信に満ちているとは言い難い状況だったのだが、いざその場に立ってみると中学校の教員としての立ち居振る舞い、表情になっている。国語という教科に関しても、教材研究への構え、アイデアの出し方等自ら学ぶ姿勢で向かうことができています。担当の先生に自分の方から質問に行く様子もみてとれる。3

年次に小学校で教壇に立ったこと、2年次からインターンシップやボランティアとして教育現場で学んできたことがまさに積み重ねとして、現場で生きて働く力になっていると感じた。

人間開発学部には教員、指導者を目指す学生が数多く学んでいる。今回の中学校訪問で改めて「本気で取り組むこと」の尊さにふれることができた。学生の「本気」を引き出し、力を発揮させてくれる学校には感謝の念しかない。目の前の児童・生徒が引き出してくれる力とも言える。翻って考えると、この「本気で取り組むこと」を支える大学の責務は大きい。どの講義・演習でもそうだが、教員が「本気」で自らの専門について語ることで、学生の間に答えることこそ大事だと思う。先日も教育法の授業のオフィスアワーで、模擬授業のまとめの仕方について「本気」で質問を受け、「本気」で話をした。専門分野で考え続けてきたことへの質問であった。教育現場の「本気」に迫る大学の講義や演習でありたいものである。

体験にであう

子ども支援学科教授 すずき 鈴木 みゆき

長年保育者(幼稚園教諭・保育士)の養成に携わっていた私が、いきなり青少年教育のナショナルセンターである独法(国立青少年教育振興機構、以下「青少年機構」とします)に異動することになったのは平成29年(2017年)の春でした。折しも「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示され、その三法令全ての改訂(保育所保育指針だけ「改定」)に関わらせていただいた身としては青天の霹靂!「さあ、これから保育の現場に伝えよう!」という矢先のことでした。「青少年機構」といわれてすぐに思いつくのは代々木にあるオリンピックセンターかもしれませんが、実は全国に28施設(青少年交流の家・青少年自然の家)を持つ巨大な組織です。中期目標中期計画に「早寝早起き朝ごはん」運動をミッションに掲げていて、私自身の研究テーマが「子どもの生活習慣」であることから、長年一緒に研究や実践に関わってきました。

在職中、私は全施設を訪ね、さまざまな体験活動を子ども達と一緒にしてきました。パウダースノーの大雪、マリンプルーの渡嘉敷・・・「青少年機構」がおこなう日常・非日常の世界での冒険や挑戦がいかに子どもの心に刻まれるかを知り、直接的・具体的な体験の重要性に気づきました。机上やIT機器だけでは出せない、心に沁み込む、感じる、気づくことの重みです。体験の中での気づきが試行錯誤や工夫を生み、学びへの意欲につながっていく面白さです。「青少年機構」での生活は、私に「幼児期にふさわしい生活」と体験とは何かを学ぶ良い機会を与えてくれました。

昨年春國學院大學に奉職し、保育者養成の世界に戻ってまいりました。コロナ禍ゆえ、リモート授業に戸惑いつつも学生さん達とのかかわりは発見もあり、同僚の先生方にもご教示いただきながら楽しく過ごしています。これからも直接的・具体的な体験の重要性を示しながら保育者養成に取り組みたいと思います。

教育実習

実習日誌を通して学ぶ子ども理解

子ども支援学科准教授 ^{やませ のりこ} 山瀬 範子



実習といえば、子どもたちとの出会いに期待がふくらむ一方、気になることのひとつが「実習日誌を書くこと」ではないでしょうか。実習を重ねても、やっぱり苦手を感じる方もいらっしゃると思います。

大変であっても、実習日誌をなぜ書くのか。私は、実習日誌は特に子ども理解を学ぶために必要な経験だと思っています。子ども理解とは子どもの姿を基にその子が何を経験し、どのような思いで、どのように生活や遊びを進めようとしているのかを読み取り、その意味を探ろうとすることです。子ども理解を基に保育者は子どもの発達に必要な経験を考へて関わりや環境の構成を行います。したがって幼児教育・保育において子ども理解は非常に重要な営みです。この、子どもを理解し、子ども理解に基づいた援助ができる力を身に付けるための第1歩が実習日誌にあります。

子どもの姿の何をどのように書くのか。どのような環境構成に注目するのか。子どもの姿に対してどのような援助を保育者は行っていると捉えるのか。実習日誌に記載されたこれらの内容は、実習生さんの視点からの子ども理解と援助を言語化したものです。文章に限らず、写真を活用したりする実習園もありますが、実習生さんの視点と捉え方を明らかにしているのは同じことです。これを実習園・実習施設の先生にご指導いただくことで、何に着目するのか、どのように子どもの思いを捉えるのか、それをどのように関わりや環境構成につなぐのかを具体的に教えていただくことが出来ます。毎日の日誌を通して子ども理解の方法と子ども理解を援助につなぐ方法を具体的に教えていただいているわけです。

あなたの視点からの気づきをどんどん日誌に書きましょう。ご指導をいただく中から、子ども理解を深めるための方法や子ども理解を基に援助を考える方法を考えてほしいと思います。実習を通してもっと学びたいと思う課題を見つけて、保育者としての成長の糧にしましょう。

理想の保育者になるために

子ども支援学科 3年 ^{やました まみか} 山下 真美海

私は、今年の二月に保育実習に取り組み、子どもたちの様子や発達の違い、また、保育士のかかわりや援助、協働について、一から学ぶことができた。実習を経て学んだことのうち、特に印象的だったことが二つある。

一つ目は「子どもへの受容と、子どもが納得した上で行動することの大切さ」だ。私が入らせていただいた三歳児クラスでは、着替えや支度など、やるべきことを終えた子どもたちから絵本を読んでほしいといわれることが多かった。しかし、私は、まだ支度が済んでいない子どもへの援助をするため、「今はごめんね。」とだけ伝え、子どもの要求に応えられないことがあった。そのため、私は担任保育士へそのような際の対応について尋ねると、「きちんと言葉で説明をして順番を待ってもらい、子どもが納得した上で行動することが大切である」というアドバイスを頂いた。次の日、子どもに説明すると、「わかった。じゃあ待っているから後で読んでね。」と言って、待っていてくれたので、後で一緒にその絵本を読むことができた。

二つ目は、「保育者間の情報共有」である。保育園では複数担任制をとっており、二人の担任保育士とフリーの保育士が一人という体制で保育を行っていた。それぞれの保育士は「保育の流れをつくる役割」、「子どもたちの援助する役割」、「環境構成をする役割」など、連携して保育をしていた。午睡中は三人が集まってクラスの子どもの話をしながら情報共有をすることで、円滑に保育が進められるような工夫をしていた。この情報共有がクラスの運営に大変重要であるということがわかった。

私は、2週間の保育実習を通して、保育現場における大切なことを観察を通して学ぶことができた。これからは幼稚園教育実習や保育実習等様々な実習があるため、それぞれで学んだことを活かし、理想の保育者像に近づいていけるよう頑張りたい。

教育インターンシップ

「自分なりの学びに」

初等教育学科 3年 たくぼ しんや
田久保 信哉

教育インターンシップを終え、実際に2年生のうちから教育現場に出て、子どもたちの姿に限らず、子どもたちを支援する教師の姿や一つ一つの言葉かけ、休み時間の過ごし方など、様々な場面を通して学びを深めることができた経験はとても大きかったと考えている。また、そのような現場での場面から、自分だったら子どもたちにどういう支援をするのか、自分だったらどういった言葉かけをするのかを、現場の教師の姿を自分自身と照らし合わせて考えていくことができた、とても有意義で実りのある唯一無二の経験ができたと感じている。

教育インターンシップを行う前までは、大学での学びを、頭の中に子どもの姿を浮かべて空想のイメージでしか捉えることができなかつたのが、実際に教育現場に出たことで、大学での学びをリアルに肌で感じ、そして実践することができた。特に、「子どもへの言葉かけの重さや大切さ」、「子ども目線に立って考えることの大切さ」は、大学の講義で学ぶことはできても、感じることはできなかった部分である。まさに、大学での学びを踏まえ、教育現場で課題設定し、自分で試して、反省し、次に繋げるという自分だけの「学びのプロセス」たるものを確立できた。その中で、将来教壇に立つことを志す者として視野が広がっていくことを実感した。

これから教育インターンシップを行う学生に伝えたいのは「自分なりの課題設定をする」ということ。現場での教師の姿、言葉かけ、子どもたちへの向き合い方。どこに課題設定してもいい。見ようとしなければ見えないし、知ろうとしなければ知れないことは多くある。自分の意識と姿勢次第で、同じ教育インターンシップでも得られるものは全然違う。前のめりに、貪欲に、失敗してもいいから挑戦してみる事が大切。自分の可能性を、自分の手で広げてきて欲しい。教師だけでなく子どもたちからも学ぶ姿勢を忘れず、将来教師となるための覚悟と責任、教職の國學院のプライドをもって、自分だけの学びにしてきて欲しいと強く願う。

毎日が非日常

健康体育学科 3年 あるが しおり
有賀 史織

私は、大学2年生の9月に母校である所沢市立向陽中学校で教育インターンシップに参加させていただきました。期間は3週間で、内容は1時間目から4時間目の体育の見学・サポートでした。教育インターンシップで学んだことは、体育の授業を実施するにあたって大変なこと、学年の違いによる指導の方法や生徒理解、現場の雰囲気など、教育現場に教員の視点として初めて立ち多くなことを学びました。

体育の授業の単元は本来水泳の予定だったのですが、コロナウイルスの影響で急遽ハンドボールに変更になりました。そして、去年の9月は雨が多くどうしても「保健」になってしまうことが多々ありました。その日になるまで外で授業を実施するのか、教室で授業を実施するのかがわからないことがありました。雨が降ることによって、授業計画を変更する必要が生じます。このように、毎日何かしら変更があったり考え直さないところが出てきたりなど、計画通りにはいかず毎日非日常でした。それに対応している先生方はさすがだなと思いました。

授業では、学年や実施する先生によって雰囲気ややり方が変わることがわかりました。1年生は、行動面・声だしなど積極的に行っている生徒が多かったです。2年生は最も成長する時期であると同時に緊張感が緩む時期ともいわれられていて、確かに1年生と比べて静かに思えました。3年生は行動面・声だしなどやはり一番輝いているなと思いました。このように、学年によって特徴が変わってきます。また、先生方も学年の特性を生かすため、授業のやり方を工夫している印象でした。どんな学年なのかを理解し、その特徴に合わせた授業を展開していくにはとても難しいですが、その中で面白さや楽しさを発見することができました。

私の中で印象的だったことはこの2つですが、ほかにも多くの事を学ぶことができました。この経験を最大限に活かし、これからの学びをより一層よいものにしていきたいです。

教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和4年1月25日(火)、令和3年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会をオンラインで、開催いたしました。全体会では成田信子学部長から、教育実習前の経験としての教育インターンシップの意義と、学生への指導に対して、受入れ校・園へお礼の言葉がありました。

その後、令和3年度教育インターンシップの全体的な実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼稚園の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科2年の小松崎優美さん、小学校実習については、初等教育学科2年の佐藤柁さん、中学校実習については、健康体育学科2年の鈴木健介さんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告しました。また各園や学校の実施状況について、横浜市立嶮山小学校児童指導担当の佐々木悠先生、横浜市立山中学校副校長の大塚政和先生、横浜市立美しが丘保育園主任の塩島桂子先生から学生の実習の様子や今後学生に期待することなどのお話をいただきました。そして第2部では、受入れ校・園の多くの先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会を行い、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通し、学びを深めることができました。



第13回夏季教育講座 教育実践フォーラムのお知らせ

テーマ

『新しい教育課程の基準とこれからの教育・保育』
～社会に開かれた教育課程～

日時 令和4年7月31日(日)
13:00～17:00

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス
【オンライン開催】

内容

- ◆全体会 基調講演他
- ◆分科会 ①幼保小接続 ②国語
③音楽・地域連携 ④体育・保健体育
⑤健康・保健体育 ⑥道徳
⑦特別活動 ⑧特別支援教育

申込み 教育実践総合センター

國學院大學 教育実践総合センターホームページ
より申し込んでください。(7月22日まで)

*多くの皆様の参加をお待ちしています。

教育インターンシップ連絡協議会

日時

第1回 令和4年7月7日(木) 16:00～
第2回 令和5年1月24日(火) 15:00～

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス

内容 教育インターンシップをよりよい活動や
学びにするために受け入れてくださっている学
校・園・施設の方々と活動の様子について情報交
換・意見交換を図る。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 近藤良彦
副センター長 高橋幸子
担 当 小笠原優子 鯨岡廣隆 岩城眞佐子